時代を拓き　世界に貢献する人を目指して

Global View

2019 年 10 月 19 日　Newsletter 第 62 号 仙台白百合学園中学・高等学校　国際教育部

「語学をまなぶスタートラインはどこにあった？」

LS コース（特別進学）主任　今野 大悟（数学科）

「君、イギリスで整数論の勉強会があるけど行ってみないか？」
当時の指導教官である森田康夫氏[1]から声をかけられたのは突然のことだった。

中学校、高校の時分より語学はからっきしであった。身近に（通っていた学校にも[2]）英語話者はおらず、英語の勉強というのはテストのためであり、それ以上でもそれ以下でもないような意識のもと大学受験に向けてわけもわからず勉強したものだった[3]。当時はインターネットも普及しておらず[4]異文化は本やテレビの中の遠い存在である。大学に進学したのちは、授業では英語の授業に加えて第二外国語としてドイツ語を選んだが、大学の授業まで時を進み、ことここに至ってようやく授業担当者としてのネイティブスピーカーと出会ったものだった。

端的に言うと、語学に対する必要性を感じることがなかったのである。

しかし、大学での学びが進んでいくにつれ、使用するテキストが英語のものしかないので英語になり、読まなければならない論文は英語のものしかないので英語となり、セミナー[5]では受講者が日本人だけとは限らないこともあれば使用言語が英語となる時も現れ始め、国際研究集会となれば当然ポスターは英語で作成したりと、気づいたらその時はやってくる。必要になる時というものは望むと望まざるとに関わらず突然やってくるのである。とはいえ数学は人類共通の言語とはよく言ったもので、数学の文章を読むのに難しい文法や言い回しは必要なく、本当に難しい部分は数学記号で表現されていた。数学関係の英単語、専門用語、中学校程度の文法、そして関係代名詞さえ押さえておけば何とかなった。

そのような中で冒頭のことである。この場合、断るという選択肢はなかったので初めて海外に行くことにした。なんてことはない、たった一週間のプログラムである。
しかし初めての海外行きはツアーの観光旅行ではないのである。初めての何かというのはワクワク感とともに不安な気持ちもでる。宿は大学の寮を利用させてもらうことになっていたので手配する必要はなかったが、大学生協を通して大学に至るまでの交通を手配したりなんだりというのも必要だった。救いであったのは勉強会には自大学や他大学の先輩も参加することであり、原則としては自律した個人での行動ではあったが全くの孤独ではないということである。大いに気が楽になるものである。よくわからなかった部分について相談することができるのは非常にありがたかった。

英国ケンブリッジの街並み

---

[1] 東北大学の教授。専門は整数論。日本数学会の理事長を務めた後で、映画「博士の愛した数式」の数学の監修をしたりしていた。そのころはカンボジアにおける数学教育について探究していたようであり、「ちょっとカンボジアに行ってきた」と言っていたのを憶えている。
[2] ALT の先生などおらず、中学校の時は英語がだれしもカタカナ英語で満足だった。
[3] センター試験でも当時リスニングは実施されておらず、読み書きさえできればそれでよかったため、ひたすら英単語・文法・リーディング・ライティングだけを授業でやっていた。
[4] Google が設立されたのは私が高校 3 年生の時であった。このころ日本では一般向け市場はパソコン通信の時代であり、Internet は大企業や学校などのものだった。なお、Google 日本語版が出たのは私が大学 2 年生の時のことである。
[5] 数学科ではゼミのことをセミナーという。

さて、冬のイギリスに行ってみて感じた感覚は新鮮なものであった。1月初旬のことであり冬至から間もなくであったゆえ、日が落ちるのが早かった。しかし、それ以上に驚いたのは日が昇るのがやたら遅いことである。日の出が8時である。日が落ちる時間はたいして変わらず、16時[6]ぐらいである。17時くらいにはすっかり暗くなる。文化面でも様々な日本との違いを感じた。建築物の様子、食事の味付けなど当然のことから、自転車が車道を走っていることなども新鮮[7]である。ヒースロー空港でコカ・コーラが500mLで1ポンドしたのは衝撃的だった。ちなみに当時の1ポンドは250円[8]し、物価の高さに度肝を抜かれた。

ケンブリッジ大学[9]で行われた肝心の勉強会は前述のように数学的な話題であれば何とか受け止めることはできたように思えた。大事な箇所は板書をするし、レジュメだってある。聞き取れなくても何とかなるのである。問題なのはそれ以外の時間であった。通常の会話ができないのである。英語という言語を用いてコミュニケーションをとるという経験をほとんど持ち合わせていないのである。こればかりは本を読むだけではどうにもならない。一日のプログラムの中で講義が終わった後に行われた大学での交流会ではオーストラリアの学生がたくさんいたが、まともにコミュニケーションを取れなかったことはよく覚えている。「日本人はみんな英語が堪能なわけではない」と彼らの指導教官に言われたことだけはなぜかよく聞き取れた。普通だったら悔しいと思うところだとは思うが、実際問題そうなのだからぐうの音も出ない。

さて、そんな旅であったが、不思議と辛くは感じなかった。大学の中にある胸像[10]は本の中でみた数学者で、そのような超人がこの大学で研究していた歴史を想起させる。自分がそこにいるというだけで感無量である。また、新しい土地でいつもと違うことをすることはエネルギーにあふれ、何をやっても頑張ったと思えた。日常の些細なことに達成感を得られるので、楽しさの方が上回るのである。スーパーに買い物に行っても新しい経験、飲食店に入って注文しても新しい経験、スターバックスなんか日本にもあるのに行ってみたくなる。その程度であれば語学力が壊滅的であっても何とかなる。極端な話、指差しすれば注文などできるのであった。

1週間なんて短い日数は、なんだかんだあっという間に終わった。帰ってきて気づいたら海外がそれまでよりも身近なものに思えていた。ほとんどしゃべれなくても何とか過ごすことができてしまうということがわかってしまったことは逆に良かったのではないかとさえ思えるものであった。入試に向けて英語を勉強していた時に抱いていた語学に対する苦手意識はいつの間にかなくなっていた。できなくてはならないと思っていたものは、全くできなくても何とかなるとわかってしまったからである。一方でそれは、言葉を通してコミュニケーションが取れればもっと良かっただろうなという思いに変わった。

ここに至って私は初めて語学に対するスタートラインに立ったと言ってよいであろう。

語学を学ぶことについてのきっかけというのは様々あるとは思うが、「何かを理解したい」という思いが根元的であり、こればかりは頭で理解するものではなく感じるものである。そうでなければ主体的に何かを学ぶということは容易なことではない。感じるためには刺激を得ることが必要である。私の場合には数学を学ぶ上での必要性もさることながら、指導教官の声掛けにより与えられた機会、海外にて異文化に触れる機会でたどり着いたのである。このような機会に飛び込んでこそ全身で感じることができる。そういうことを体験することができたのであった。

---

[6] 仙台は標準時からの差が大きいため日の出・日の入りともに早くなる。また、イギリスの緯度は北海道より高い。
[7] 自転車も車両であり、現在は車道を走るよう本来のルール通りになっているが、当時日本では車道を自転車が走るのは大変に危険だった。
[8] なお、その後ポンドは対円で暴落し120円まで下がった。このレートだったら1ポンドのコーラに何も驚くことはなかっただろう。
[9] ケンブリッジ大学は様々な有名人を輩出しているが科学で最も有名なのはアイザック・ニュートンだろうか。ちなみにケンブリッジ大学の近くには「アイザック・ニュートン」という飲食店があり、集まって毎日フィッシュアンドチップスを食べたのも思い出である。
[10] よく覚えているのは「インドの魔術師」の異名をとる数学者ラマヌジャンの胸像である。持っていた携帯電話で写真を撮ったものが上の画像である。ラマヌジャンの生涯については2016年に「奇蹟がくれた数式」というタイトルで映画化もされた。ラマヌジャンを見出したケンブリッジ大学の教授であるハーディーが執筆したテキストが、私が初めて本格的に読んだ整数論の本であったこともあり感慨深かったのである。